明石書店『多文化共生社会に生きる』（仮題）原稿

タイトル：「大学における多文化共生に向けた実践活動報告－国際交流活動、多文化共修科目、ヒューマンライブラリーを中心に―」

名前：　岡　智之（おか　ともゆき）

プロフィール：　東京学芸大学留学生センター教授。日本語学校、韓国・大学の日本語教師を経て、現職。専門は言語学。留学生への日本語教育、留学生と日本人学生との交流コーディネーション、「多文化共修科目」で異文化理解教育を担当。多様性理解のため、ヒューマンライブラリーなど様々なイベントを企画運営している。日本ヒューマンライブラリー学会理事。

１．はじめに

　稿者は、都内の日本語学校、韓国の大学での日本語教師を経て、現在は大学の留学生センターで、留学生に対する日本語教育をおこなっている。また、2010年度から、留学生の日本語支援や、日本人学生との交流活動をコーディネートしてきた。グローバル化が叫ばれる中で、日本人学生が自ら留学に行くことも重要であるが、大学において、様々な形で留学生との交流が行われることが、異文化理解や多文化共生の第一歩になると考える。2015年度からは、学部共通科目として留学生と共に学ぶ「多文化共修科目」が開設され、異文化理解を教室で共に学ぶとともに、学外で体験する課外活動や、グループでプロジェクトを作って発表する活動を行っている。異文化とは、外国人だけではなく、セクシュアルマイノリティや障がい者もそれぞれの文化を持つという観点から、ゲストスピーカーを迎えてお話を聞いたり、2016年度からは、そうしたマイノリティを生きた「本」として対話するイベントである「ヒューマンライブラリー」を開催している。本稿では、国際交流活動、多文化共修科目、ヒューマンライブラリーの3つを軸にした、大学における多文化共生に向けた実践報告を行っていく。

2．国際交流コーディネーション

　横田・白土（2004）では、自国民が他国を理解し尊重する態度を培うことが大学教育の重要課題であり、そのために留学生を活用すべきであり、留学生と日本人学生の交流を促進することは重要な教育活動である（実際にはそうなっていないが）と指摘されている。また、加賀美・小松（2013）「大学コミュニティにおける多文化共生」では、留学生が卒業後も日本の地域や企業社会で就職し、生活者として定住していくためには、学業面での達成だけではなく、ホスト社会の日本の人々との間に友好的な関係が維持され、日本人や日本人社会に対する親和的な態度がいかに獲得できるかが重要である。一方、日本人学生にとっても、今後、日本社会に定着していく外国人留学生との交流は、グローバル社会を生き抜くスキルや強さを学ぶ機会ともなりえるとしている。

　このような意義から、全国の大学で様々な交流活動が行われてきたが、本学では、2010年度に、稿者が留学生と日本人学生との交流事業を担当することになり、国際交流カフェ、にほんごカフェ、国際交流合宿などの企画を行ってきた。

　「国際交流カフェ」は、2010年4月から開始して、9年目になった。2012年度から、学芸カフェテリアの企画として、毎週昼休みのランチ講座としておこなわれている。様々な国の留学生の発表、語学体験、様々なトピックでの交流、各種パーティ、課外活動（春のお散歩、紅葉狩り）など、日常的な留学生と日本人学生との交流の場になってきた。ランチ講座では、他に、チャイナカフェ、コリアカフェ、アジアカフェ、欧州カフェなど、それぞれの国や地域ごとのカフェが意欲的な学生によって開催されてきた。

また、2010年度より、日本人学生ボランティアが、留学生の日本語を支援する目的で、日本語支援室、現在では「にほんごカフェ」が開設されている。日本人学生、留学生それぞれが都合のいい時限を設定してマッチングする方式でやり、毎週3回程度のにほんごカフェが設定され、日本語の支援や会話の相手など、密度の濃い交流の時間として定着している。

「国際交流合宿」は、2010年以来、毎年7,8月の時期に、山中湖、清里、河口湖、草津、館山などで1泊2日で行われ、2018年で10回目を迎えた。大型バス1台をチャーターし、学生40～50人（うち日本人学生は10名程度）が参加している。活動内容は、野外活動（山中散策、ハイキング、牧場体験など）、交流会、発表会などで、2016年度からは、1日目の夜に、ヒューマンライブラリー形式で、学生がそれぞれの体験などを皆に語る場を設けている。2日目午前の発表会では、3~6名程度の班ごとに、出し物を考え、寸劇（世界の学生生活）、世界のクイズ・ゲーム、世界の音楽・ダンス、折り紙・切り紙体験、世界の民族衣装など、班ごとに工夫を凝らした発表が行われた。企画を考え、練習するなどを通して、学生同士が合宿以前から交流を行うことができている。2017年から5月末の早い時期に行うようになって、その後の交流につながる春学期一番のメインイベントとなっている。

3．多文化共修科目

　留学生と日本人学生が共修する科目は、先駆的には、信州大学をはじめとした大学で始められて発展してきた（徳井2002）。最近では、北海道大学、東北大、立命館大などの先進的な事例が、坂本・堀江・米澤（2017）『多文化間共修』に紹介されている。ここでは、多文化間共修の意義を、「学生の異文化に対する感受性や対応能力を高め、文化の多様性を理解し、グローバル化に対応するスキルを育成する」としている。

　本学でも、2015年度に「多文化共修科目」4科目が学部共通科目として開設され、「多文化共修科目A 異文化理解とコミュニケーション」「多文化共修科目B　多文化社会とコミュニケーション」の2科目を稿者が担当している（岡2016）。トピックとして、在日外国人問題（在日コリアン、難民問題など）、沖縄基地問題、言語教育問題、グローバル化の問題などを取り上げてきた。体験学習として、朝鮮大学校訪問と学生との交流（毎学期）、群馬県大泉市・太田市のブラジル人学校訪問と交流（2015～2017年度）、群馬県館林市ロヒンギャ難民集住地訪問（2018年春学期）、ゲストスピーカーや講演者として、聴覚障がい者、視覚障がい者、セクシュアルマイノリティ（トランスジェンダー）、難民（クルド人）などを呼んでお話を聞いた。最終発表として、学生それぞれの関心からプロジェクトを作り、発表を行っている。これまでのグループの発表テーマとしては、「外国につながる子どもの支援」「難民問題」「在日コリアン問題」「沖縄基地問題」「LGBTと性教育について」「障がい者とのかかわり方」「イスラム教について」などの多彩なテーマで行われている。2018年春学期の授業の最終日には、まとめとして、「異文化理解とは何か」というテーマでワールドカフェ形式で、ディスカッションを行っている。学生たちは、「異文化理解や、多文化共生は、単に外国人とのコミュニケーションをするということにとどまらない。セクシュアルマイノリティや障がい者などの理解も異文化や多様性の理解として、重要視していかなければならない」などの気づきがあり、今後の学生生活や社会生活に生かしていく知恵としてくれているようである。

4．ヒューマンライブラリー

ヒューマンライブラリー（以後、HLと略する）は、マイノリティなどを生きた「本」として、読者に貸し出し、30分間の対話を通して、偏見の低減や、多様性の理解をめざしたイベントである。2000年にデンマークで始まったHLは、今や全世界に広がり、日本でも、明治大学、駒澤大学をはじめとした大学や、NPOなどで行われ広がっている。2016年12月には、本学で初めてHLを開催した。在日外国人（クルド難民、イスラム教徒留学生、地域の外国人）、セクシュアルマイノリティ（LGBT、Xジェンダー）、障がい者（視覚、聴覚、発達障がいなど）、うつ病、難病などのマイノリティや、教育支援者を「本」として10～15冊招いて「読者」と対話する取り組みを行った。第1回目は、学内の学生支援部署の協力を得て、「本」やスタッフを確保していったが、全学に向けた説明会や、多文化共修科目の課外活動としても位置付け、学生を「司書」として、「本」との打ち合わせに一緒に行ったり、当日の介助などをやってもらったりして、より深い学びが行われたように思う。広く地域にも呼びかけ、2017年12月の第2回開催では、80名の参加者が集まり、濃密な対話が行われた。多様性理解のイベントとして、教育活動や地域の活動に幅広く生かしていける今注目の取り組みである。

5．おわりに

　多文化共生の取り組みは、学校、地域などあらゆる場で可能である。本章では、主に大学での多文化共生社会に向けた実践について紹介したが、これは、小中高などの学校教育や地域の中での国際理解、多様性理解にも大いに生かしていけると考える。すべての人がありのままに自分の個性を生かして生きていける社会を目指して、稿者はまず大学において教員、教育支援者の多様性理解から始め、さらに地域と連携した活動を展開しながら、多文化共生の拠点として大学を位置づけ、活動を広げていきたいと考えている。

参考文献

岡　智之（2016）「多文化共修科目の挑戦：2015年春学期「異文化理解とコミュニケーション」の授業実践と振り返り」『東京学芸大学紀要　総合教育科学系Ⅱ』第67集、pp377-397.

加賀美登美代・小松翠（2013）「大学コミュニティにおける多文化共生」加賀美登美代編著『多文化共生論－多様性理解のためのヒントとレッスン』明石書店、pp265-289.

坂本利子・堀江未来・米澤由香子（2017）『多文化間共修』学文社

坪井健・横田雅弘・工藤和宏（2018）『ヒューマンライブラリー　多様性を育む「人を貸し出す図書館」の実践と研究』明石書店

徳井厚子（2002）『多文化共生のコミュニケーション―日本語教育の現場から―』アルク

横田雅弘・白土悟（2004）『留学生アドバイジング－学習・生活・心理をいかに支援するか』ナカニシヤ出版.

「考えてみましょう」

* あなたの学校や地域でできる多様性理解の活動を考えてみよう。
* 「異文化理解とは何か」、「多文化共生とは何か」、ワールドカフェで話し合ってみよう。